

村岡花子著「村岡花子エッセイ集 想像の翼にのって一」河出書房新社 2014年7月20日刊を読む

憂いは言わず

1. 子どもの言葉を聞いていますとさまざまのことを教えられ、考えさせられます。
八つの女の子が、朝ぼっかりと目をあくとすぐに、
「お母ちゃま、ゆうべ、おふとんはいだ？」
とたずねました。
最初にたずねられた時は、なんとも思わずに答えました。
2. そのつぎの朝も、つぎの朝も、同じことを、しかもやや心配げにたずねられたとき、はじめて気がついたことは「この子は、心配しているな」ということでした。
3. まい晩、母が寢床につくまえはむろんですが、夜中も二度、三度と目をさましては、この子がかぜをひかぬようと、ふとんをかけてやるのを、つい朝のよもやまばなしの中で、
「子どもがおふとんをはぐのが心配で、おちおち眠れない」
と、話したのは一度や二度ではありませんでした。子どもはちゃんとそれを聞いていたのです。
4. 聞いていただけでなく、母が安眠できないことに対して、自分の責任を感じたのでした。
5. 昼の活動につかれきって、ぐっすりと眠る我が子のあどけない姿に、ほほえみを投げかけながら、そっとふとんをかけなおしてやる母には、そんな世話はなんの苦勞でもないのですが、つい不注意に語る言葉が、幼い心には深刻にひびくらしいのです。
6. 母の安眠をさまたげはしなかったかと、心づかいをするのかもしれませんが。
床にならぶ幼き顔のいづれにも母の憂いは言うべきにあらず(田原とき子)
7. 『新万葉集』の中のこの一首を私はしばしば思いうかべます。この歌の作者は、子どもの寝冷え^{ねび}を心配する思いなどを「母の憂い」として詠^よんでいるのではないことは十分わかっていますけれども、その心づかいは、事の大小にかかわらず、すべての場合にかようなものと言ってもよいでしょう。幼い子どものまえではあまりに無反省な愚痴などは言うべきではないと思います。
8. とくに話し相手の少ない母は、いとけないわが子に独り言ともつかず愚痴ともつかぬようなことをくりかえしていますが、それが積もり積もって子どもたちに暗い影をおとしていきます。知らぬ

間に子どものかかわり知らぬ人たちのかげ口になってしまったりもするのです。

おさな子の心にこうした爪痕を残すことこそ、おそれなければならないと思うのです。

P107 ~ 109

こだま

1. 「私はアルフレッド・テニスンには我慢がならないのですね。あんまり甘ったるくて胸がむかつかますよ。いつかの晩、『イノック・アーデン』の最後の二行にあまり腹が立ったので、窓から本をほうり出したんです。だが翌朝、あの『つづぶえの歌』に免じて拾いあげましたよ。あの歌のためなら、ほかのくだらない作品をも勘弁^{かんべん}してやる気になりそうでね。」カナダの女流作家ルーシー・モンゴメリ^{あらわ}著すところの「アン・ブックス」の第五巻目(新潮文庫『アンの幸福』)の中に出てくる偏屈^{へんくつ}な老人はこう言っている。
2. モンゴメリ女史は幾度となく「アン・ブックス」の中で詩人テニスンにふれているが、女史の学校時代テニスンは英国王室の桂冠詩人^{けいかんしじん}として詩壇に確固たる地位を占めていた。したがって教科書にもテニスンの作品は多く使われていたのであろう。私の母校もカナダ系であったので、英語は全部カナダ、オンタリオ州のリーダーによって教えられたので、テニスンの詩は各学年の教科書にはいっていた。
3. 筆が横道にそれたが、あの偏屈な老人が、この一篇のために他のすべての嫌いな詩を赦^{ゆる}すと言ったほどに愛していた「こだま」(エコーズ)は確かに名詩である。
「我々のこだまは魂から魂へと伝えられる」
4. 私はいつもこの一行の中に教育ということの持つ意義のすべてがひそんでいるように考えて、愛^{あい}誦^{しょう}している。
5. 「こだま」と題されたこの短い歌は長い叙事詩「プリンセス」のところどころに間奏曲のようにはさまれたもので、「こだま」のほかにも、「つばめよ、つばめ」、それから若い人たちがよく合唱する子守歌「スイート・エンド・ロー」もある。
6. 「エコーズ」はそれらの中でも傑作と称せられていいものであろう。短い三節のうち四つの世界を描いている。騎士道華やか^{きしどう}だった昔の頃と、たくましい自然界と夢幻^{むげん}の国のつづぶえの響くロマンスと、そして人類に約束される偉大な将来とがここに歌われる。人類の将来への讃歌の中では愛情にふれているけれども、それは一人から一人への愛情ではなく、一つ一つの生命がそのあとにつづく無数の生命に対していただく愛について歌っている。
7. けれども、この真理は恋人の口から彼の愛する女性に向かって語られており、この偉大な、しか

も普遍的な要素は、愛し合う二人の結びつきを元にして実現されるという美しい構想のもとに述べられている。

8. 私の「心の日記」はさまざまな方面へ伸びていく。さきごろ、長沼弘毅ながぬまこうき氏の『酒のみのうた』という本を読んだ(自由国民社刊)。酒と私とはえんがないのだが、長沼さんと私とは年来のおつきあいであり、長沼さんの筆になるものはほとんど読んでいる。『酒のみのうた』には「続・和漢の散歩」と副題がついている。最初のページをあけると、

生けるもの つひにも死ぬるものにあれば
今あるほどはたのしくをあらな

9. 大伴旅人おおとものたびとの歌が眼についた。次には大隈言道おおくまことみちの、「明日のうれひは明日ぞ愁へむ」で結んである「今日は今日」の歌。酒のみの心理ではあろうけれども、長沼氏は「やけっぱちのように(あるいは、刹那主義のように)見えて、案外そうではない。これで、心機一転、大いに働いたりするのである」と注を加えている。

10. 「あすのことを思いわずらうな、あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その一日だけで十分である」これはマタイによる福音書に見出す言葉である。

P110 ~ 112

おぼえのよい人たち

1. 湘南電車しょうなんの中でのこと、横浜から乗り込んだ数名の紳士たちの一人が私のとなりの席にすわった。ときどき、私の顔を見るのが何か言いたいような表情でもあるし、偶然のようにも思われる。
2. 本を読もうと思って、カバンをあけたとたんに、その若紳士は口をひらいた——
「失礼ですが、村岡さんではいらっしゃいませんか？」私はびっくりして、ちょっとその人を見つめた。
3. 彼は私の答えを待たずに、
「さっきからどうもそんな気がしてならなかったんですが、今、そのバッグを見て……」
その旅行用バッグにはH・Mと頭文字が墨で書いてあったのだ。
4. 不思議そうな顔をしている私の表情に答えて、彼は話しつづけた。
「ぼくはあなたが『子供の新聞』を放送していらした頃、ちょうど小学生だったんです。あのニュースが好きで好きで——確か6時20分からでしたね——外で何をしていたても必ず帰ってきて母といっしょに聞きましたよ。」

5. 戦争に行って無事に帰って、今、こういうところにつとめています」

と、横浜のそれがしの会社係長の名刺を差し出した。今は亡き私たちの家庭の男の子は、大正9年(1920)生まれだが、この若紳士は私たちの「道雄」より2、3年あとの生まれらしい。

6. 「直接お逢いするのは今初めてですが、新聞や雑誌で写真を見ますからね。横浜で乗ってからずっと、そうじゃないかと考えてたんです。なつかしいですね、その声」とあまりしんみりされて私は少々テレてしまった。

7. 私の声に関する限り、日本の人たちのおぼえのよさに、私はいつも驚かされる。車中の紳士^{いわ}曰く、「ああいう番組が今もあるといいですね」と。「あら、NHKの『子供の新聞』はずっとありましたよ。あなたが大人になってしまったんですよ」と私は大いに笑ったのだが、彼はどうも承服しないようだった。

P113 ~ 114

<コメント>

モンゴメリ作の「赤毛のアン」シリーズを翻訳し、また、戦前にはJOAKのラジオ番組「子供の新聞」をラジオのおばさんとして担当した村岡花子女史の心暖まる珠玉のエッセイ、「想像の翼にのって」。是非、御一読を。

— 2016年7月3日(日) 林 明夫記 —